『東京大学言語学論集』37 (2016.9) 41-70

# 小倉進平の朝鮮語方言調査について

## —『朝鮮語方言の研究』所載資料の活用のために—

福　井　玲
fkr@l.u-tokyo.ac.jp

キーワード: 朝鮮語　方言調査　小倉進平　言語地図

要　旨

本稿の目的は，小倉進平の『朝鮮語方言の研究』所載の資料を用いて言語地図を作り，その解釈を行う研究のための準備作業として，この書を通覧してさまざまな疑問点を解明し，あわせて言語地図を描くための項目を選び出すことにある。具体的には，本書に見られる調査地点，音声表記，調査項目に関して，それぞれ問題点を論じ，その結果に基づいて本書の調査項目の中から，言語地図を作るのにふさわしい項目200余りを選定した。

## 1　はじめに

日本における近代的な朝鮮語学の基礎を作った小倉進平 (1882–1944) は，1911年に朝鮮に赴任して以来数次にわたって朝鮮語の方言調査を行い，その結果を数多くの論文，モノグラフとして刊行した。そして，亡くなる直前にはそれらを集大成し，その結果は没後に『朝鮮語方言の研究』(1944, 上下2巻，岩波書店）として刊行された[1]。しかしその後，朝鮮語の方言研究は河野六郎に引き継がれ，いくつかの著名な研究として結実はしたものの[2]，小倉進平によって収集された朝鮮語方言資料は全体として見れば十分に活用されてきたとはいえない状態にある。そこで，筆者は過去数年にわたって，この本の上巻に掲載された資料をもとに，言語地図を作成し，さらにそれを文献上の資料とつきあわせて語彙史の研究を行ない，その成果の一部を発表するとともに（Fukui (2015a, 2015b) など）今後もこれを継続する予定である[3]。

朝鮮語（韓国語）の方言調査としては，韓国では戦後に金亨奎 (1974), 崔鶴根 (1978) などの

---

[1] 刊行の経緯については下巻末に付された柴田武によるあとがきに詳しい。それによると上巻は小倉進平自身によって校了し，下巻は再校の途中で昭和19年1月に病に伏すこととなり，校正の続きを言語学研究室の柴田武・三根谷徹両氏に託されたとのことである。その後，小倉進平は2月に亡くなり，両氏の手によってその年のうちに刊行された。あとがきの日付は5月15日，奥付の発行日は9月10日となっている。

[2] 河野六郎(1945)『朝鮮語方言学試攷』など。

[3] 2015年度にはそのために科学研究費を申請し，現在はそれに基づいて研究を行っている（基盤研究 (C)（一般)，課題番号15K02504，研究課題名「小倉進平による朝鮮語方言資料の言語地図化と言語地図作成ソフトウェアの開発」)。またここ数年韓国朝鮮文化研究室の授業として語彙史の研究を行い，学生諸君とともに考察を行ってきた。出席された学生諸子に感謝する。なお，この資料の言語地図化はすでに中井精一 (1997) によって行われているが，調査地点，音声記号の扱い方など，いくつか問題点があり，またその結果の解釈がまったく行われていないので，新たに研究を行う必要があるものと考えている。

業績のほか，韓国精神文化研究院による全国的で組織的な方言調査が行われ，その結果は，韓国精神文化院編 (1987–1995)『韓国方言資料集』全 9 巻，およびその中から 153 個の項目を選んで言語地図化した李翊燮他 (2008)『韓国言語地図』が刊行されている。しかし，戦後には朝鮮半島全域にわたる調査は行われていないため，その点で小倉進平の調査資料は依然として重要な価値を持っており，さらに調査時期の古さも今となっては重要である。調査年代は主として 1910 年代から 1930 年代にかけてであるが，今日においてはそれ自体が歴史的な資料と見なすこともできる。

本稿の目的は，この資料を活用するための準備作業として，そこに報告されている調査地点，各語形の表記に使われている音声記号と彼が行った音声学的観察，さらに調査項目の特徴を精査したうえで，利用上の注意事項としてまとめ，さらにそれに基づいて言語地図化のための項目を選び出すことにある。これは，本書が必ずしも首尾一貫した形で，本書だけですべてが理解できるような形では書かれてはおらず，場合によっては誤解を引き起こしかねない部分が少なからずあることによる。このため，筆者は本書と小倉進平の他の論著を対照することによって，できるだけ彼の真意を汲むことを心掛けることとする。

なお，本書に含まれる小倉進平の方言研究に関しては，すでにいくつかの論評や紹介が行われている。例えば，李崇寧 (1976: 216) では，「貴重な資料集と研究成果として今日でも生命をもっている（筆者訳，以下同様）」としながらも，「調査した語彙が所によって一定していないが，それはおそらく調査ノートの項目が最初とそのあとのもので違っていたようだ」という点を欠点としてあげている。また，李秉根 (2005: 55–56) では，「方言学」が学問としてきちんと定位されていない，また，「個体史中心の原子論的記述」であって体系化されていない，といった批判がなされている。

本稿での筆者の関心は，小倉進平の学問的立場を論ずることではなく，実際に『朝鮮語方言の研究』に盛り込まれた材料がこれまで後進の研究者によって十分に活用されてこなかった点をふまえて，それを最大限活用することにある。そして，本稿はそれに先立つ準備として必要になった作業の結果をまとめたものである。

## 2　調査地点について

本書の下巻の第 1 章「総説」は本書全体の序論であるとともに，調査地点や音声記号，引用書目一覧などの凡例的部分を含んでいる。その中で，調査地点一覧は下巻第 15–20 頁に掲載されており，またその地理上の位置は下巻末に付けられた地図の地点番号で確認できる。そこでは調査地点は 259 地点となっているが，上巻資料篇のデータには，実際にはそこにあげられていない地点が 5 地点見られる。次のとおりである（なお，これらを含む全調査地点を表 1 に掲げ，またその下にその位置を示す地図（図 1 ）を掲げる）。

(1) 忠清南道 葛山。忠清南道西部，海美の南，洪城の西に位置する。「夕陽」(p. 5)，「陽炎」(p. 9) を始めとして多数の項目に登場する。

(2) 全羅南道 智島。全羅南道西部，務安の北西に位置する。「霹靂・落雷」(p. 11)，「正月」(p. 211) をはじめとしてこれも多数の項目に登場する。

(3) 咸鏡南道 高山。咸鏡南道の南端，新高山の東に位置する。「陽炎」(p. 9)，「霹靂・落雷」(p. 11) など数項目に登場。あるいは調査地点一覧に含まれている新高山の誤植の可能性も考慮されたが，同一項目で高山と新高山が両方あげられている場合があるので（「子の妻」(p. 63) など），別々の地点と考えられる。

(4) 咸鏡北道 烟台洞。「蜀黍」(p. 208)，「玉蜀黍」(p. 211) などの項目や，「助動詞」では比較的多数見られる。なお，この烟台（韓国ではふつう「煙臺」と表記される）とは朝鮮時代に軍事施設のあった場所で，烟台洞という地名も各地に見られる。しかし，この地点の位置は調査地点一覧と地図によって明示されていないので，筆者自身，これがどこの烟台洞に当たるのか，長い間確信をもてないでいたが，本書の下巻 (p. 232) の「なづな（薺）名義考」で咸北の地名を列挙した中に「富居・烟台洞（富寧郡）・慶興」とあることから，これが富寧郡の地名であることが判明した。

(5) 咸鏡北道 茂山郡 明臣。茂山郡豊渓面の地名。「寺」(p. 133) に見られる。これは小倉進平も地点一覧にないことを意識したのか，明臣（茂山郡）と，郡名を補って記している。

これらを加えると，実際の調査地点は 264 地点ということになる。

次に，地名の表記が地点一覧と資料篇とで一致しない場合が数地点見られる。以下のとおりである。

忠清南道　炭浦（安眠島）　地点一覧では「炭浦（安眠島）」とあるが，資料篇では「安眠島」とだけ記載されていることが多い。

咸鏡南道　五老里　地点一覧ではこう記載されているが，資料篇では「五老」とだけ記載されていることが多い。

平安北道　龍岩浦　地点一覧ではこう記載されているが，資料篇では「龍岩」とのみ記載されていることが多い。

なお，表 1 に見られるとおり，行政区画が現在とは異なる場合がある。例えば，済州島の 5 地点は，当時は全羅南道に入れられていた。また，蔚珍と平海は，現在は慶尚北道に属するが当時は江原道の一部であった。その他，調査地点名として挙げられているのに，実際の資料篇にはほとんどあるいはまったくデータが登場しない地点もかなり存在する。

表 1　調査地点一覧（番号を付したのは下巻 15–20 頁にあげられている地点。そこに含まれていない 5 地点は * を付けて示した。）

全羅南道（済州島を含む）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 濟州 | 2 城山 | 3 旌義 | 4 西歸 | 5 大靜 | 6 突山 | 7 麗水 |
| 8 光陽 | 9 順天 | 10 筏橋 | 11 高興 | 12 寶城 | 13 長興 | 14 康津 |
| 15 莞島 | * 智島 | 16 海南 | 17 珍島 | 18 靈岩 | 19 木浦 | 20 咸平 |

21 靈光　22 羅州　23 和順　24 光州　25 長城　26 潭陽　27 玉果
28 谷城　29 求禮

全羅北道

30 雲峰　31 南原　32 淳昌　33 井邑　34 高敞　35 扶安　36 金堤
37 裡里　38 群山　39 全州　40 任實　41 長水　42 鎭安　43 茂朱
44 錦山

慶尚南道

45 蔚山　46 梁山　47 東萊　48 釜山　49 金海　50 馬山　51 巨濟
52 統營　53 固城　54 咸安　55 宜寧　56 晋州　57 泗川　58 南海
59 河東　60 山淸　61 咸陽　62 居昌　63 陜川　64 昌寧　65 密陽

慶尚北道

66 淸道　67 慶山　68 永川　69 慶州　70 浦項　71 興海　72 盈德
73 大邱　74 高靈　75 星州　76 倭館　77 知禮　78 金泉　79 善山
80 軍威　81 義城　82 尚州　83 咸昌　84 聞慶　85 醴泉　86 安東
87 榮州　88 乃城　89 英陽　90 靑松　91 道洞

忠淸南道

92 大田　93 公州　94 論山　95 江景　96 扶餘　97 鴻山　98 靑陽
99 舒川　100 藍浦　101 大川　102 保寧　103 炭浦　104 廣川　105 洪城
106 海美　* 葛山　107 瑞山　108 唐津　109 沔川　110 禮山　111 溫陽
112 天安　113 鳥致院

忠淸北道

114 淸州　115 報恩　116 沃川　117 永同　118 鎭川　119 陰城　120 槐山
121 忠州　122 丹陽　123 堤川

京畿道

124 平澤　125 安城　126 水原　127 龍仁　128 利川　129 驪州　130 楊平
131 廣州　132 京城　133 永登浦　134 仁川　135 金浦　136 江華　137 開城
138 長湍　139 汶山　140 議政府　141 漣川　142 抱川　143 加平

江原道

144 歙谷　145 通川　146 長箭　147 高城　148 杆城　149 襄陽　150 注文津
151 江陵　152 三陟　153 蔚珍　154 平海　155 旌善　156 寧越　157 平昌
158 原州　159 横城　160 洪川　161 春川　162 華川　163 楊口　164 麟蹄
165 淮陽　166 金化　167 鐵原　168 平康　169 伊川

黃海道

170 金川　171 延安　172 海州　173 甕津　174 苔灘　175 長淵　176 松禾
177 殷栗　178 安岳　179 信川　180 載寧　181 沙里院　182 黃州　183 瑞興
184 南川　185 新溪　186 遂安　187 谷山

咸鏡南道

188 新高山　* 高山　189 安邊　190 元山　191 德源　192 文川　193 高原
194 永興　195 定平　196 咸興　197 五老里　198 新興　199 洪原　200 北靑
201 利原　202 端川　203 豊山　204 甲山　205 惠山　206 三水　207 長津

咸鏡北道

208 城津　209 吉州　210 明川　211 鏡城　212 羅南　213 淸津　214 富居

215 富寧　* 烟台洞　216 茂山　* 明臣　217 會寧　218 鍾城　219 穩城
220 慶源　221 慶興　222 雄基

平安南道

223 中和　224 平壤　225 鎭南浦　226 龍岡　227 江西　228 江東　229 成川
230 陽德　231 孟山　232 寧遠　233 德川　234 价川　235 順川　236 順安
237 永柔　238 肅川　239 安州

平安北道

240 博川　241 寧邊　242 熙川　243 雲山　244 泰川　245 龜城　246 定州
247 宣川　248 鐵山　249 龍岩浦　250 新義州　251 義州　252 朔州　253 昌城
254 碧潼　255 楚山　256 渭原　257 江界　258 慈城　259 厚昌

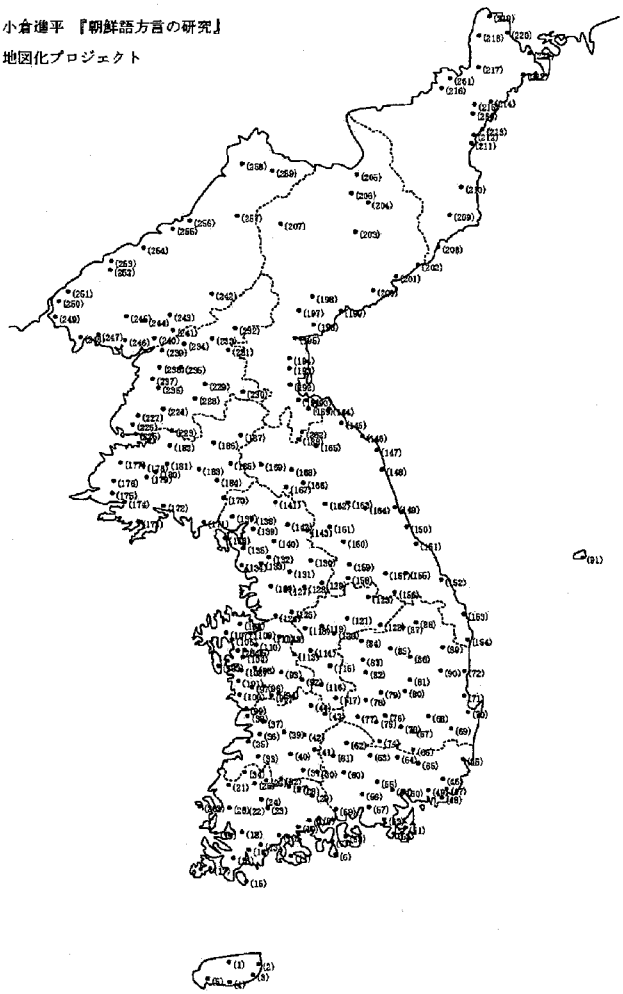


図1　調査地点の位置（1–259 は小倉進平(1944 下: 15–20)による地点番号，260–264 はそこに漏れているものを筆者が追加したもの。詳細は上の説明参照。）

## 3　朝鮮語の転写について

小倉進平は本書の下巻第 13–14 頁で，「諺文のローマ字転写」を説明している。それによれば朝鮮語の転写には「ローマ字及びそれに基く記号」を用いているが，これは「諺文」が朝鮮語を表記するのに最も便宜な文字ではあるが，印刷上の困難を救い，読者の便宜をはかるためであるとしている。表 2 にその一覽表を掲げるが，そこでの転写には 2 種類があり，1 つはハングルの子音・母音の 1 字 1 字に対応したローマ字転写で，これは主として文献上のデータの提示に用いられている。もう 1 つが [ ] 内に示すような音声学的な表記で，現代の方言の発音を示す場合に用いられている。

表 2　本書の「諺文のローマ字転写」（下巻 13–14 頁）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1. ㅏ = a [a] | 2. ㅑ = ia [ja] | 3. ㅓ = ɔ [ɔ] | 4. ㅕ = iɔ [jɔ] |
| 5. ㅗ = o [o] | 6. ㅛ = io [jo] | 7. ㅜ = u [u] | 8. ㅠ = iu [ju] |
| 9. ㅡ = ù [ù] | 10. ㅣ = i [i] | 11. ㆍ = ɐ | 12. ㅐ, ㅔ = ai, ɐi [ɛ] |
| 13. ㅒ = iai [jɛ] | 14. ㅔ = ɔi [e] | 15. ㅖ = iɔi [je] | 16. ㅚ = oi [ø] |
| 17. ㅟ = ui [wi] | 18. ㅢ = ùi [ùi] | 19. ㅘ = oa [wa] | 20. ㅝ = uɔ [wɔ] |
| 21. ㅙ = oai [wɛ] | 22. ㅞ = uɔi [we] | 23. ㄱ = k [k, g] | 24. ㄴ = n [n] |
| 25. ㄷ = t [t, d] | 26. ㄹ = r [l, r] | 27. ㅁ = m [m] | 28. ㅂ = p [p, b] |
| 29. ㅅ = s [s, t] | 30. ㅇ = ŋ [ŋ] | 31. ㅈ = č [tʃ, dʒ] | 32. ㅊ = čʿ [tʃʿ] |
| 33. ㅋ = kʿ [kʿ] | 34. ㅌ = tʿ [tʿ] | 35. ㅍ = pʿ [pʿ] | 36. ㅎ = h [h] |
| 37. ㄺ = sk [ʔk, ʔg] | 38. ㄼ = st [ʔt, ʔd] | 39. ㄼ = sp [ʔp, ʔb] | 40. ㅆ = ss [ʔs] |
| 41. ㅉ = sč [ʔtʃ, ʔdʒ] | 42. ㅿ = ż | | |

このうち音声学的な表記では，基本的に国際音声字母 (IPA) に基づいた音声記号が用いられているが，部分的にその標準的な用法からずれる場合もあり，また，時には彼独自の約束事として決めた記号も用いられている。上の表 2 に示すとおりであるが，特異な使用法としては，ハングルの ㅡ に相当する母音を表すのに [ù]（上点つきの u）を用いている点，また，上の表には出ていないが，済州島に見られるかつての ㅇ に相当する母音を表記するのに [*o*]（o の斜体字）を用いている点があげられる。さらに，ハングルの 어 に相当する母音として，ここにあげられた [ɔ] の他にもう一つ [ʉ] が用いられる場合がある。また，済州島では，[*ö*]（ウムラウトつき o の斜体字）という記号も用いられているが，これもここでは解説されていない。以下では，まずこれらについて見ていくことにする。

まず，ハングルの ㅡ に相当する母音であるが，この表記は本書では [ù]（上点つきの u）になっているが，他の論文（小倉進平 1931a: 144–145）では小倉進平は [ʉ] という記号を用いていた。[ʉ] を [ù] に変更した理由は小倉進平 (1934: 94) において，「従来私は ㅡ に対しては [ʉ] を用ひ来ったが，字画を簡単ならしむると，어 の第二類に関係を保たしむるとの理由によ

り，之を [ù] と改めた」としている。なお，上点（overdot）は中舌母音を表わす記号で[4]，その意味では中舌化した非円唇狭母音を表わすのに [ü̈] は適切であるが，[ù] は中舌化した円唇母音を表わすことになってしまうので，適切とは言えない。

次に，ハングルの 어 に相当する母音の表記であるが，彼の他の論文を参照すると，この表記に関しては 2 つの問題があることが分かる。一つは，この母音には彼の呼び方では「第一類，第二類」という 2 種類があり，本書の上記の部分では詳しくは述べられていないが，小倉進平 (1931a: 142)では「어 に上述の如き二種の発音上の区別の存することは，其の後の諸家も認める所であって，私も全然同意である。但し記号に就いては簡単で合理的なものを選びたい」として，第一類の 업다（負ふ），벌（罰）などの場合の 어 は ɔ で表わし，업다（無），벌（蜂）などの第二類の 어 は「此の音は国語ウ (ɯ) と同様に両唇の円みを帯ばず，しかもウの場合よりも舌尖を前方に引き出し舌面を低く平らかにすることによって発音せられる中性的の音と考える」として ü̈ で表わしている。なおこの記号は本書では使われておらず，その代わりに ʉ が用いられている。これは，上で見たように母音 으 の表記において，この論文におけるような ü̈ ではなく，ù が用いられていることと軌を一にするものかと思われるが，ʉ は現在の IPA では円唇の中舌狭母音を指すので，非円唇であるこの母音を表現するにはあまり相応しいとはいえない。

この母音に関するもう 1 つの問題は，この母音の発音の地域差に関することである。同じ論文中で彼は「第一類・第二類は京城及び多くの地方に於て区別して発音されるが，南部方言にありては，第一類を欠き，第二類のみ存する所がある」としている。筆者の観察でも，慶尚道，全羅道，済州島の方言において，しばしば 어 に相当する母音が奥舌の [ɔ] ではなく中舌母音 [ə] で現れるが，ここで小倉進平が第二類のみ存するとしているのはこのことを指すものと思われる。しかしながら，本書の資料篇においてはこれらの方言の 어 に相当する母音の表記についてそのような書き分けは行われておらず ɔ のみで表記されている。しかしその表記には実際はこれらの南部方言における [ə] の場合も包摂されていると解すべきであろう。

次に，中世語の ㅇ に対応する済州島方言に特有の母音について見ていこう。この母音を表記するのに彼は [ɔ̈] (o の斜体字）を用いているが，「o の斜体字」という選択は，視覚的に普通の o と紛らわしい上に，他の言語でもそのような記号が用いられた例がないと思われるので，あまり適切とはいえない。実際に既存の記号の中では [ɔ̈] が済州島のこの母音の表記に相応しいと考えられるが，어 の表記に [ə] ではなく [ɔ̈] が使われているので，それと区別するためにやむなく新たな記号を考案したものと思われる。

また，もう 1 つこれも済州島に特有の母音を表わす記号であるが，[ö] (ウムラウトつき o の斜体字）についても注意が必要である。これは中世語の二重母音 ㆍㅣ に相当する単母音に用いられている。これは原著における上の表 2 に該当する部分に註釈として「ㆍㅣは朝鮮大部分の地にありては，ㅐと同一発音の [ɛ] となるが，済州島には特殊の発音を保存する」（下巻 p. 14）

[4] Pullum and Ladusaw (1986)（土田・福井・中川翻訳 (2003)）を参照。

とあるものに該当するが，それがどのような母音であるかについはここでは書かれていない。ただし，本書下巻の第二章各論25「済州島方言[5]」では，[ö] について次のような解説が見られる(pp. 459–461)。

[o] (ᄋᆞ) と [a] (ㅇㅏ) との間に明かに発音上の区別の存することは，上述の通りであるが，その特質は独り単母音の場合に於てのみならず，これが他の母音と結合した場合に於ても，発音上に区別が現はれて来る。即ち 애 ([ɛ]を以てあらはす) と ᄋᆡ ([ö]を以てあらはす) との間にも明白な区別が行はれるのである。例えば，

| 애 [ɛ] | ᄋᆡ [ö] |
|---|---|
| [kɛ-mat] (浦)・[kɛ] (犬)・[pe-gɛ] (枕)・ | [pɔn-gö] (電)・[ʔsil-gö] (肝)・ |
| [tʃo-gɛŋ-i] (蛤)。 | [kö-u-ri] (蚯蚓)・[kök] (客)。 |
| ……（中略）…… | |
| [hɛ] (害)。 | [hö] (日)。 |

の如きは各地とも最も明らかに発音上の区別を保存する。

同様の記述は小倉進平 (1931a: 146) にも見られる。

ᄋᆡ　一般には 애 と同音である故に，ɛ を以って表はす。但し，済州島方言にありては，ᄋᆞ は両唇の円みを帯びた音である故に，애 の如く全然開口音とはならず，외 (其の条参照) 種の音となり，唯 외よりも稍々開口の形を取る。私は之に対して ö の記号を与える。済州島人が 애と ᄋᆡとを明らかに区別して発音することは，陸地人の奇異に感ずる程である。例えば陸地方面では대 (竹)・ᄃᆡ (対) とも何れも tɛ: と発音するが，済州島人は前者を tɛ:，後者を tö と発音し，又陸地方面では해 (害)・ᄒᆡ (日) とも何れも hɛ: と発音するが，島人は前者を hɛ:，後者を hö と発音して区別する。

すなわち，小倉進平が ö で表わす母音は，円唇の前舌母音で，외 に対応する母音 ([ø]) よりも若干広い母音ということになるが，そのような母音は，筆者の意見では，現在の IPA の枠組みにおける円唇前舌半広母音 [œ] (より正確には [œ̞]) が最も近いのではないかと思われる (参考のため下の図 1, 2 に小倉進平 (1931a, 1931b) に示されている母音図を掲載する)。

なお，この母音に関するこのような小倉進平の観察は，その後の研究者には受け継がれておらず，この観察が正しいものかどうかは今後の課題として残されている。例えば，玄平孝 (1985: 372–375, 461) では，ᄋᆡ に対応する母音は済州島では語頭音節で ㅔ [e] になっているとされており，Umeda Hiroyuki (1960: 34), 鄭承喆 (1995: 86–87) も同様である。小倉進平の観察の誤りであった可能性も考えられるが，上の２つの引用から分かるように，彼はこの母音の特徴を非常

[5] この部分は小倉進平 (1931b) がもとになっている。

に明確に述べているので，それ以降にこの母音が円唇性を失って，[ö] > [e] と変化したのかもしれない。

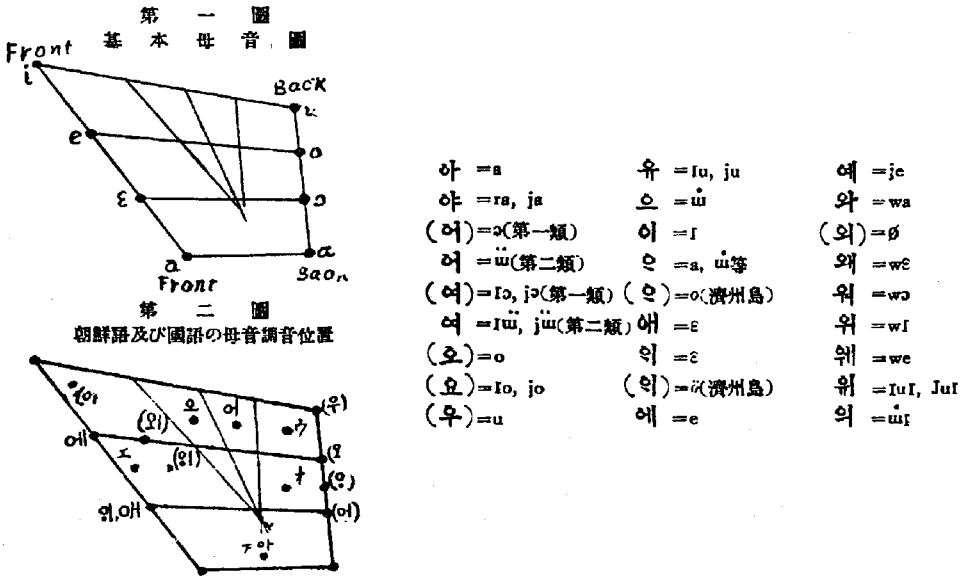


図２　小倉進平 (1931a: 148) 所載の朝鮮語および日本語の母音調音位置（上の第 2 図）と，諺文と小倉によるその発音記号。

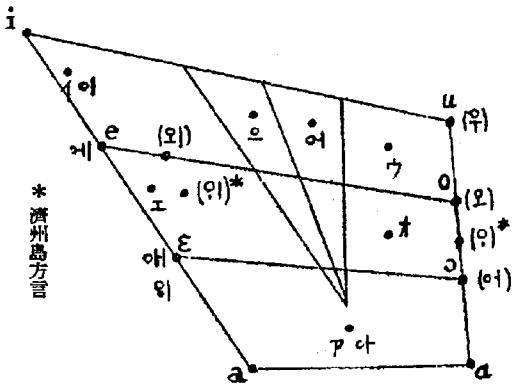


図３　小倉進平 (1931b: 29) 所載の済州島方言の母音の調音位置の図。

次に，それ以外の本書における音声表記の特徴と問題点についてまとめる。

彼の音声表記では，すべての語形は基本的にハイフンで音節境界が明示されている。例えば，ko-gu-ma, kam-dʒa のごとくである。これは，しばしば二重母音と母音連続を区別するのに有効になる。というのは，上の表 2 に示した転写の原則に従えば，例えばハングルの ㅟ に相当す

る母音は [wi], ㅚ に相当する母音は [wa] になるはずであるが，本書の資料篇においては，前者は ui，後者は oa と表記されている例が非常に多いのである。こうした表記は単純な誤りであろうと思われるが，資料篇ではほとんどの例がこのように表記されているので，あるいは，表記法が一定していなかったのかとも考えられるが，ともあれ，このような場合に間にハイフンが来ることはないので，これらが 1 音節であったことは保障されるのである。

次に本書における長母音の表記を見ていくことにしよう。長母音の由来に関しては，(1) 中世語の上声に由来するもの，(2) 2 つの母音の融合に由来するもの，(3) その他（借用語の場合や語源不明の場合）の場合という 3 つの場合が考えられる。以下，この 3 つの例をいくつかあげてみよう。

(1) [pɛ:l], [pi:l] (星), [sɛ:m][6] (泉), [sa:-ram] (人), [to:-k'i], [to:-tʃi] (斧), [pu:-ri] (嘴), [ko:m] (熊), [pɔ:l], [pɔ:-ri] (蜂), ……

(2) [no:l], [no:-ri] (夕焼), [ka:l] (秋), [kjɔ:l], [tʃʉ:k], [tʃʉ:l], [tʃu:l-gi] (冬), [ma:l], [mɔ:l], [mo:l] (村落), [jɔ:l] (浅瀬), [kɛ:m], [ʔkɛ:m], [kɛ:mi] (榛の実), [mɛ:m], [mɛ:-mi] (蝉), ……

(3) [kol-lo:-si], [kol-lo:-sin] (ゴム靴 (咸鏡道) ＜Rus. галоши), [ka-rʉm-da:-si] (鉛筆(咸鏡道)＜Rus. карандаш), [hɛ:m] (飯饌 (咸鏡道)), [mu-du:-kɛ] (ビール瓶 (咸鏡道) ＜Rus. бутылка), ……

ここで問題になるのは，(1) の上声由来の場合である。(2) の場合などは本書資料篇で比較的忠実に記されている思われるが，(1) の場合は，例えば [øn][7] (左), [pjɔŋ] (病), [kjɛ-dʒip], [kɛ-dʒip], [ke-dʒip] (女), [hjo-dʒa] (孝子), [mu-daŋ] (巫女), [sa-ma-gui] (痣), [tol] (石), [pɔm] (虎)など，いずれも中世語で第一音節に上声を持ち，長母音が予想されるにもかかわらず，どの地点でもそう表記されていないものがかなり存在する。なお，(3) のうちロシア語からの借用語は，長母音の現れる位置がロシア語のアクセントの位置に一致しているのが興味深い。

次に子音に関する問題点を見ていく。まず，本書における濃音表記に関して，通常は声門閉鎖音の記号 (ʔ) を無声子音の記号の前に付けて表わされているのであるが，語中においては，濃音が予想されるにも関わらずこの記号が用いられていない場合がある。ただし，語中でも，有声音間では，閉鎖音と破擦音は本書では必ず有声音で表記されるので，そのような環境で無声音の記号が用いられ，かつ声門閉鎖音の記号が付けられないのは異例に見える。声門閉鎖音の記号 (ʔ) が脱落した誤りの可能性もあり，あるいは，無表記の濃音と言うべきものかもしれない。実例としては次のような場合がある。

(4) [mɛ-san-jaŋ-kun], [mɛ-sɛ-nan-kun], [mɛ-kun ] (鷹匠, p.75), [mal-sam] (言葉, p. 508), ……

(5) [l-kɔ-ra] (問・未来・対下(済州島), p.410), [tʉ̀l-ko] (聞いて, p. 503), ……

小倉進平の語中での濃音表記全般を見ると，音節末閉鎖音の直後では，濃音表記を用いない

---

[6] この項目に関しては，長母音となる場合の他に，[sɛ-am], [si-am]のごとき二重母音で現れる語形もあって，注目を引く。

[7] 母音 [ø] が現れる場合には原則として短母音として表記されているような印象を受ける。

ことで一貫しているが，直前の音が，流音，鼻音などの場合には，上の (4), (5) のように,声門閉鎖音の記号を付けない場合と，同じような環境でも付けられている場合とが混在する。これについては彼自身の表記の基準が揺れていたのかもしれない。

次に，ハングルの ㅅㅣ に相当する音の子音の表記の問題を指摘しておきたい。本書の資料篇では一貫して [si] となっているが，実際には多くの地方で [ʃi] (より正確には[ɕi]) となるはずである。実際には地域あるいは個人によって，[si]〜[ʃi] の両方の可能性がありうるが，[si] という発音が優勢であると見ていたのか，あるいは，音韻的な区別には関わらないので，前者にまとめたのか，正確な理由は分からない。

また，子音の発音にかかわるもう１つ別の問題がある。それは [kje] と [ke], [pʻje] と [pʻe] などのような，現代の標準語では失われている対立の問題である。本書の項目中では，「子女，女児 (p.67)」，「肺臓 (p.98)」，「糠 (p.182)」などでは，[j] の有無によって語形が区別して書かれているが，一方，下巻のさまざまな論考の中にはそれとは一致しない表記もみられる。

その他，p.11「電光」の項目に [pɔn-gø] という表記が見え，[ø] のイタリックが用いられているが，これは上で引用した部分からすると [pɔn-gö] の誤りのようである。

最後に本書における小倉進平の表記方法の特徴をまとめてみよう。本書では表記に音声記号が用いられてはいるが，多くの場合それはハングルにも置き換え可能な，ある意味で規則的なものであり，語ごとの，あるいは地方ごとの細かな音色の違いまで書き分けてはいない。しかし，考えてみれば本書のように朝鮮半島全体の方言を扱う場合にはある程度規則的な表記を行わないとかえって混乱をきたす可能性があり，それを避けるためにある程度は概括的な表記になっていると考えられる。なお，本稿では触れなかったが，小倉進平が朝鮮語のいくつかの方言に見られるアクセントをどのように捉えていたのかも重要なテーマであるが，これは個々の語彙項目の言語地図の作成には直接関わらないので，別稿で論ずる予定である。

## 4　調査対象語彙について

本書の調査対象は語彙項目と文法項目から成り，語彙的な項目は意味的な分類によって，また文法項目は品詞によってそれぞれ分類されている。その全てを項目数とともに記すと次のようになる。

天文 (27 項目)　時候 (17 項目)　地理・河海 (40 項目)　方位 (15 項目)　人倫 (59 項目)
身体 (55 項目)　家屋 (39 項目)　服飾 (51 項目)　飲食 (33 項目)　農耕 (30 項目)
花果 (14 項目)　菜蔬 (38 項目)　金石 (11 項目)　器具 (76 項目)　舟車 (11 項目)
飛禽 (29 項目)　走獣 (61 項目)　水族 (18 項目)　昆虫・爬虫等 (27 項目)　草木 (36 項目)
形容詞 (36 項目)　動詞 (70 項目)　助動詞 (425 項目)　副詞 (19 項目)　助詞 (25 項目)
接頭辞・接尾辞 (7 項目)　句・短文 (7 項目)　雑 (33 項目)

これら全ての項目数を合計した総項目数は 1309 項目となる。そのうち，各種分類語彙に，形容詞，動詞，副詞，接頭辞・接尾辞，句・短文，雑を合わせたものを語彙的な項目と見なすと，

その総数は859となり，純粋な文法項目である助動詞，助詞の総数は450となる。

さて，李崇寧 (1976:216) などでも指摘されているように，本書の調査対象語彙に関して最も問題となるのは，調査項目ごとに調査地点が異なることである。朝鮮半島の八道全域に調査が及んでいるものもあれば，ごく一部の地域のデータしか記されていない場合もある。実際，調査項目の中には，全地域で用いられていることを前提したものだけではなく，ある特定の地点でのみ使われるものも含まれている。例えば，色の違いによる馬の種類，山人参の種類，中国およびロシアとの国境地帯における借用語などがその代表的な例であるが，それらは，そもそもある地域における特殊な語形を記録するために項目としてあげられているもので，それらを各地でどのように呼ぶかという観点から収録されたものではないと考えられる。

当然のことながら語彙史研究のために言語地図を描くためには，半島全域にわたって調査されている項目が望ましいのであるが，そうした項目の割合は，さほど多くはなく，語彙的な項目（859項目）の中の4分の1弱に過ぎない。

もう1つ，調査項目の選び方に関して留意しておかねばならない点がある。本書の項目名はすべて日本語になっているが，必ずしも日本語を基準として選ばれているわけではないということである。そのせいで，項目名が単純な名詞ではなく説明的な表現になっている場合があり（たとえば「海水のうねり」，「温挨の石床」など），また，日本語では同一の項目になるものがいくつかに分かれていることがある。たとえば「女」と表記された項目は2つ（これを以下では「女【1】」，「女【2】」と区別する）存在するが，前者は通常の [kjɛ-dʒip] およびその音声的変種，後者は一種の卑称となる別語である。このように，項目名は日本語であっても，項目の実体は朝鮮語がもとになっていると考えられる。

さて，以下では，調査項目一覧と各項目の道別調査状況を示すことにする。その際，次のような点に注意する必要がある。資料篇中でしばしばある語形に対して，地点名をあげずに「一般・鮮内一般・全鮮各地・多くの地方にて・鮮内各地・各地とも」などの表現が用いられている。これらは特定の地点ではなく，朝鮮全体で一般的にあるいは多く使われている語形を指す。このような場合，地図化するのが困難である。このような場合にあげられている語形は今日の標準語と同じものが多いが，中には異なる場合もある。

表記に関して，漢字は現行の字体に直し，仮名遣いはもとのままとする。踊り字は仮名に直す。小倉進平自身による語形の読み方，注記などは（　）内に入れてそのままあげてある。また，読み方や，指示されるものが難解な場合は，筆者の注記を【　】に入れて示す。項目名のあとに，どの地域のデータが存在するかを，道名の略称で示す。その際，朝鮮半島の8道すべてにデータが存在するものには●を，1つ足りずに7道のデータが存在するものには◎の記号を表示した。また，上で述べたように，地点名を特定せず多くの地点で用いられる語形としてあげてあるものは「一般・多く・各地」などと示した。8道すべてにデータが存在しながらも，語形の一部がこの種の概括的表記になっているものは地図を描くのが困難なので○で表示した。その他，項目によって次のような略号で語形の特徴を示した。

全(済)　(当時の) 全羅南道の中でも済州島のみ語形があげられているもの。
(参)　山人参採取業者の隠語
(ロ)　ロシア語からの借用語

山人参採取業者がなぜ隠語を使うのかという点については，本書下巻 p. 287 において「かれらが入山するに当っては，できるだけ日常使用の朝鮮語を避け，一種の隠語を使用する。それはかれらが互に人参の所在を隠蔽し，或は収穫高を漏洩すまじと警戒する意味合ひからではなく，普通の朝鮮語を使用することは，人参の自生する霊域をけがし，人参の収穫を減少せしめるという一種の信仰に基くものである」と説明されている。また，ロシア語からの借用語は主に咸鏡道の語形に見られる。

天文 (27 項目)
(1) 天　全
(2) 日　一般・咸(参)
(3) 日暈　全(済)
(4) 日蝕　一般・咸
(5) 日光　全慶忠京江咸
(6) 暁　全慶忠京江黄咸平●
(7) 夕陽　全忠江咸
(8) 昼夜　咸平
(9) 月暈　全慶忠江
(10) 月蝕　咸
(11) 弦　全(済)
(12) 星　全慶忠京江黄咸平●
(13) 風　黄咸
(14) 旋風　全(済)
(15) 北風　慶江咸
(16) 東風　慶忠江
(17) 夕焼　全慶忠京江黄咸平●
(18) 陽炎(かげろふ) 全慶忠京江黄咸平●
(19) 虹　全慶忠江
(20) 電光　全
(21) 霹靂・落雷　全慶忠京江咸
(22) 雨　一般・江咸平(参)
(23) 細雨　全慶忠京江黄咸平●
(24) 雪　一般・咸(参)
(25) 雹(へう)　全慶忠京江黄咸平●
(26) 垂氷(つらら)　全慶忠京江黄咸◎
(27) 天地　咸平

ここで全道にわたって調査されている項目は「暁」「星」「夕焼」「陽炎」「細雨」「雹」の6つで，「垂氷」がそれに準ずる。その他，個別に気が付く点を以下に列挙する。(1)「天」はなぜか全羅道の語形しかあげられていない。(2)「日」は上述のように済州島では [hö] となるはずであるが，ここでは「一般」の [hɛ] しかあげられていない。(12)「星」の代表的な語形は [piɔl] となっているが，これは [pjɔl] (あるいは [pjɔ:l]) の誤記かもしれない(実際，下巻 p. 32 には [pjɔl] という表記が見られる)。(8)「昼夜」，(27)「天地」は漢字音における口蓋音化に関わる項目であり，その点で特徴のある咸鏡道・平安道の発音のみが挙げられている。

時候 (17 項目)
(1) 本年　慶忠江
(2) 凶年　各地・慶
(3) 正月　全慶忠江黄咸平◎
(4) 二月　全(済)
(5) 六月　平
(6) 夏　全慶忠京江黄咸平●
(7) 秋　全慶忠京江黄咸平●
(8) 冬　全慶忠京江黄咸◎
(9) 昨日　慶
(10) 明後日　全慶忠江

(11) 明明後日　全慶忠江
(12) 頃日　全
(13) 今　各地・咸
(14) 昔　全慶忠平
(15) 朝　全慶京黄咸
(16) 夕　全慶忠京江黄咸平●
(17) 和暢　多く・平

全道的に調査されている項目は「夏」「秋」「夕」の３つであり，「冬」「正月」がそれに準ずる。(17)「和暢」は漢字音における口蓋音化に関わる項目である。

地理・河海 (40 項目)
(1) 世界　多く・全慶江咸
(2) 京(みやこ)　各地
(3) 田舎(ゐなか)　全慶忠江
(4) 村落　全慶忠京江黄咸平●
(5) 野原　全慶忠京江黄咸平●
(6) 丘　全慶忠京江黄咸平●
(7) 畑の畔　全忠
(8) 塩田　全慶忠京江咸
(9) 横町　黄咸平
(10) 角(かど)　慶黄咸平
(11) 峰　全慶忠江
(12) 峠　全慶忠江
(13) 崖路　慶忠京江黄咸平◎
(14) 岳　全(済)
(15) 樵路　全慶忠京江黄咸平●
(16) 路　全慶忠京江黄咸平●
(17) 山・墓　全慶忠京江黄咸平●
(18) 穴　全慶忠京江黄咸平●
(19) 長さ　全慶京黄咸
(20) 小川【1】　慶江
(21) 小川【2】　全慶京江黄咸平◎
(22) 溝【1】　全慶平
(23) 溝【2】　全慶忠京江黄咸平●
(24) 溝(下水などに)　慶忠
(25) 川【1】　黄平
(26) 川【2】　全慶忠江
(27) 水脈　全慶忠江咸
(28) 浦　全慶忠江
(29) 海　全慶忠京江黄咸平●
(30) 海水　全慶黄咸
(31) 海水のうねり　全慶忠江咸
(32) 波　全慶忠京江黄咸平●
(33) 渡船場　全慶忠京江黄咸平●
(34) 浅瀬　全慶忠京江黄咸平●
(35) 水辺　京黄咸平
(36) 池　多く・慶忠江咸平
(37) 井戸　全慶忠京江黄咸平●
(38) 泉　全慶忠京江黄咸◎
(39) 泡　全慶忠京江咸
(40) 岩礁　全慶

ここで全道にわたって調査されている項目は「村落」「野原」「丘」「樵路」「路」「山・墓」「穴」「溝【2】」「海」「波」「渡船場」「浅瀬」「井戸」の 13 であり，「崖路」「小川【2】」「泉」がそれに準ずる。(14)「岳」[o-rom] などはその地域に特有のものである。

方位 (15 項目)
(1) 側　全慶忠京江黄咸平●
(2) 隅　全慶忠
(3) 角(かど)　全慶忠京江黄咸平●
(4) 南　各地
(5) 北　各地・京
(6) 左　全慶忠江咸
(7) 外　全慶忠京江黄咸平●
(8) 最前　京黄咸
(9) 此処・此方　各地・咸
(10) 其処・其方　各地・咸
(11) 彼(かの)　各地・平
(12) 彼処・彼方　各地・忠江咸
(13) 近処　咸
(14) 何処　咸
(15) 方(東方・左方など)　全慶忠京江咸

ここで全道にわたって調査されている項目は「側」「角(かど)」「外」の３つである。(4)「南」(5)「北」などは，通常の語彙ではなく固有語式の言い方のみがあげられている。

人倫 (59 項目)

(1) 人　各地・咸平(参)
(2) 男女　各地・平
(3) 祖父　全(済)
(4) 祖母　全(済)
(5) 父　全(済)
(6) 母　全(済)
(7) 親戚　各地・咸
(8) 親　江咸
(9) 伯母　咸
(10) 伯叔母　咸
(11) 妻の父　咸
(12) 妻の母　咸
(13) 鰥　慶忠江咸
(14) 寡婦　慶忠江咸
(15) 夫(をっと)　咸
(16) 夫(他人の)　慶
(17) 夫人(他人の)　慶
(18) 新婦　咸
(19) 兄　慶京江咸
(20) 弟　全慶忠江黄咸平◎
(21) 姉妹　全慶忠京江黄咸平●
(22) 子の妻　全慶忠京江黄咸平●
(23) 男子・男児　全慶忠京江黄咸平●
(24) 女【1】　全慶忠京江黄咸平●
(25) 女【2】　各地・全(済)
(26) 子女・女児　全慶京江黄咸平◎
(27) 女(卑称)　咸平
(28) 幼児　咸
(29) 両班　多く・咸平
(30) 還甲　多く・全慶忠江黄咸
(31) 官職　全慶忠江
(32) 面長　多く・咸平
(33) 李書房　多く・咸平
(34) 孝子　多く・全慶江黄咸平
(35) 弟子　多く・慶忠平
(36) 僧　？(語形のみ)・京(参)
(37) 尼　全慶忠江
(38) 売卜者　全慶忠京江黄咸平●
(39) 巫女(みこ)　全慶忠京江黄咸平●
(40) 盲人　全慶忠江咸
(41) 医者　全(済，小児語)
(42) 鷹匠　全慶京黄咸平
(43) 冶匠　全慶
(44) 雇主　全(済)
(45) 被雇主　全慶忠京江
(46) 日雇人　全慶忠江
(47) 官妓　全(済)
(48) 老人　京黄咸平
(49) 小使　全(済)
(50) 吝嗇家　咸平
(51) 恐ろしがる人　全(済)
(52) 奴(やつ)　全
(53) 乞食　全慶忠江咸
(54) 倭奴(日本人を軽蔑していふ語)　全慶忠江黄咸
(55) 胡奴(支那人を軽蔑していふ語)　京黄咸平
(56) ロシア人(軽蔑していふ)　咸平
(57) 汝【1】　多く・全慶
(58) 汝【2】　多く・慶江咸
(59) 他人　多く・全慶

ここでは，本来項目名としては一般的なものでありながら，特定の地域の特殊な語形しかあげていない項目が目立つ((3)〜(12), (15)〜(18)など)。全道的に調査されている項目は「姉妹」「子の妻」「男子・男児」「女【1】」「売卜者」「巫女」の６つであり，「弟」「子女・女児」がそれに準ずる。(29)「両班」(30)「還甲」(32)「面長」(33)「李書房」などは漢字音の特徴を示す項目と考えられる。(36)「僧」は最初に語形のみが記され地域の指定がない。「一般に」などの表現が抜けているらしい。(58)「汝【2】」は，[tʃa-ne] が「多くの地方」の代表語形とされる２人称の代名詞を表す項目であるが，ここに，[tʃa-gúi], [tʃɛ-gɛ], [tʃa-gi] などの語形が

みられるのは興味深い。

身体 (55 項目)

(1) 頭(卑称)　全慶忠江咸
(2) 毛髪　全慶忠江
(3) 鬚　全慶忠江
(4) 額　全慶忠江
(5) 耳(卑称)　全慶京黄咸
(6) 耳の辺　全(済)
(7) 鼻　多く・全慶
(8) 鼻水　多く・慶
(9) 眼(卑称)　全慶京黄咸
(10) 眼　江咸平(参)
(11) 瞼　全慶忠京江黄咸平●
(12) 瞳　慶忠江
(13) 頬　全慶忠京江黄咸平●
(14) 口　各地・全(済)
(15) 唇　全慶忠京江黄咸平●
(16) 兎唇(いぐち)の人　全慶忠京江黄咸平●
(17) 舌　全慶忠京江黄咸平●
(18) 歯　大部分・全慶黄咸平
(19) 牙　全慶忠京江黄咸平●
(20) 頤(あご)　全慶忠京江黄咸平●
(21) 頸　各地・全(済)
(22) 腹　大部分・全(済)
(23) 背　各地・全慶京黄咸平
(24) 肩　多く・全慶
(25) 臍(へそ)　全慶忠京江黄咸平●
(26) 尻　各地・全慶咸
(27) 腰　全(済)
(28) 肺臓　全慶忠京江黄咸平●
(29) 腎臓　全慶忠京江黄咸平●
(30) 脾臓　全慶忠京江咸
(31) 胆　全慶忠京江黄咸平●
(32) 手　各地・平(参)
(33) 手の爪　全慶忠江
(34) 臂　全慶忠京江黄咸平●
(35) 膝　全慶忠京江黄咸平●
(36) 脛(すね)　全慶
(37) 腨(こむら)　全
(38) 踝(くるぶし)　全慶忠
(39) 病　全慶忠京江黄咸平●
(40) 唖者(おし)　全慶忠京江黄咸平●
(41) 嚏(くしゃみ)　咸平
(42) 腫・瘡(できもの)　全慶忠江
(43) 面皰(にきび)　全慶
(44) 癬瘡　全慶忠江
(45) 雀斑(そばかす)　全慶
(46) 痣　全慶忠京江黄咸平●
(47) 瘧(おこり・マラリヤ)　全慶京黄咸
(48) 天然痘　全京黄咸平
(49) 痲疹(はしか)　全慶忠京江黄咸平●
(50) 筋　咸
(51) 骨　全慶忠京江
(52) 体操　多く・平
(53) 力　全慶忠京江黄咸平●
(54) 歩行　多く・咸
(55) 虚言　京黄咸平

ここでは，「鼻」「口」「手」など方言量の少ない項目は「多く，各地」などと概括的に扱われ，それ以外では極めて珍しい語形のみがあげられている。また，「頭」「耳」などは一般的な項目としては立項されず，卑称のみが扱われている。全道的に調査されている項目は「瞼」「頬」「唇」「兎唇の人」「舌」「牙」「頤」「臍」「肺臓」「腎臓」「肝」「臂」「膝」「病」「唖者(おし)」「痣」「痲疹(はしか)」「力」の 18 である。個々の語形に関しては，[pjam]（頬，濃音ではない），[ni]（歯）が，平安道などの北部方言のみならず済州島方言にもみられる点，などが注目される。

家屋 (39 項目)

(1) 柱　全慶忠京江黄咸平●
(2) 瓦　全慶忠京江黄咸平●
(3) 瓦屋　全慶忠京咸平
(4) 瓦の一片　全慶

(5) 煙出し【煙突】　全慶忠京江黄咸平●
(6) 温挨の石床(いしゆか)　全慶忠
(7) 温挨の部屋　全京江黄
(8) 妻の家　咸
(9) 停車場【1】　咸(ロ)
(10) 停車場【2】　咸(ロ)
(11) 便所　全慶忠黄咸平
(12) 庭　全慶忠江
(13) 木製の櫃(多く米などを入る)　全京黄咸
(14) 鍛冶場　咸
(15) 堤防　慶京
(16) 仮小屋　咸平
(17) 釘　全慶忠京江黄咸平●
(18) 板間・縁(えん)　全慶忠京江咸
(19) 障子窓(左右に開くもの)　京黄咸
(20) 小窓(壁に穿ったもの)　多く・平忠京江黄咸平●
(21) 台所(地方により炊口にもいふ)　全慶
(22) 壁木藏(押入)　全慶忠京江
(23) 棚(たな)　全慶忠京江黄咸平●
(24) 食器棚(台所にある)　全慶忠京黄咸
(25) 柴扉(柴の戸)　慶忠京江黄咸平◎
(26) 椽木(たるき)　全慶忠江
(27) 覆ひ物(雪降りの時の)　忠江
(28) 梯子(はしご)　全忠
(29) 屋敷　黄咸平
(30) 近所・隣村　黄咸平
(31) 隣　多く・全平
(32) 籬　多く・全京江咸
(33) 人家　咸(参)
(34) 宿　咸(参)
(35) 軒端(のきば)　全慶黄咸平
(36) 寺　大部分・咸平
(37) 石垣　大部分・咸平
(38) 学校　多く・全慶忠江黄咸平○
(39) 懸板(板の額面)　大部分・全忠

全道的に調査されている項目は「柱」「瓦」「煙出し【煙突】」「釘」「台所」「棚」の6つで，それに準ずるのは「柴扉」である。咸鏡道にはロシア語からの借用語が見られる。

服飾 (51項目)
(1) 耳輪　全慶忠京江黄咸平●
(2) 褂子(寒地で着用する支那式の周衣)　咸平
(3) 下駄(内地人の履く下駄。国語起源)　全慶忠京江黄咸◎
(4) 靴(国語起源)　全慶忠京江黄咸◎
(5) 紐(ひも)　全慶忠京
(6) 襟(えり)　全慶忠京江咸
(7) 笠子(冠の一種)　全慶忠京江黄咸◎
(8) ポケット　全慶忠京江黄咸平●
(9) 革靴　全慶忠江咸
(10) 毛帽(犬の皮などで造った防寒用の帽子)　全慶忠江
(11) ゴム靴　咸
(12) 笠　平咸(参)
(13) 木履　全慶忠京江黄咸平●
(14) 靴下(くつした)　全慶忠京江黄咸◎
(15) 髢(かもじ)　全慶忠京江黄咸平●
(16) 鞠子鞋(牛皮などで造った支那式の靴)　咸平
(17) 周衣　全慶忠京江黄咸平●
(18) 足紐(足首の所にて袴衣の下部を縛る布片)　全慶忠京江黄咸◎
(19) リボン(女児頭髪の)　咸
(20) 防寒帽(毛糸などで編み，頭顔部を蔽ひ，両眼のみを露はすもの)　全京黄咸
(21) 木綿　全慶忠京江黄咸平●
(22) 煖帽(冬季に冠る一種の帽子)　京江黄咸平
(23) 麻製の鞋　慶忠京江黄咸平◎
(24) 草鞋(婦女用の奇麗な飾りを附したもの)　咸
(25) 石鹸　全慶忠京江黄咸◎
(26) 麻布　全慶忠京江黄咸◎
(27) 簪(かんざし)　全慶忠京江黄咸平●
(28) 毛布　咸平
(29) 靴(支那型のもの)　咸
(30) チョッキ(内側に羊毛のあるもの)　忠江
(31) 外套　咸(ロ)
(32) 冬帽　咸
(33) 帽子【1】　咸平(ロ)
(34) 帽子【2】　忠
(35) 木靴(式典などに用ひる)　全慶忠京江黄咸平●
(36) 靴　咸平(ロ)

(37) 鞋　江咸平(参)
(38) 衣・着物　忠京江黄咸平
(39) 鴉青(染料の一種)　京黄咸
(40) 衣服の材料　全慶忠江
(41) 短靴(革製, 農夫が山に入り, 田に草取る時に履く)　咸
(42) 周衣(綿入)　慶忠京江黄咸平◎
(43) 巾着　多く・全慶
(44) 藁の草履　各地・慶京黄咸平
(45) 靴(支那型のもの, 小児用で装飾を施す)　黄咸平
(46) 裳(婦女用)　全慶忠京江黄咸平●
(47) 嫁入り着物(木綿・絹など)　咸
(48) 吐手(腕に貫く防寒具)　多く・全慶忠江
(49) 襁褓(おしめ)　多く・咸
(50) 帯(おび)　多く・全慶忠江
(51) 亢羅(織物の一種)　多く・慶忠江

全道的に調査されている項目は「耳輪」「ポケット」「木履」「髢(かもじ)」「周衣」「木綿」「簪(かんざし)」「木靴(式典などに用ひる)」「裳(婦女用)」の９つで,「靴(国語起源)」「下駄」「笠子(冠の一種)」「靴下」「足紐」「麻製の鞋」「石鹸」「麻布」「周衣(綿入)」がそれに準ずる。ここでも咸鏡道ではロシア語からの借用語が多い。

飲食 (33 項目)
(1) 漬物　全慶忠京江黄咸◎
(2) 粉　全慶忠京江黄咸平●
(3) 粟飯　多く・京黄
(4) 肉魚　全慶忠京江黄咸平●
(5) 羹の汁　多く・咸平(参)
(6) 醤油　多く・平(参)
(7) 豆腐　全慶忠江
(8) 食時　京黄咸平
(9) 円餅(粟製)　全
(10) 煙草　各地・京咸平
(11) 饅頭(朝鮮式の饅頭には「鮮」, 支那式の饅頭には「支」の字を記入す)　全慶忠京江黄咸平●
(12) 炒麺(ほし飯の粉)　全慶忠京江黄咸◎
(13) 水　各地・江咸平(参)
(14) 蕎麦粉の餅　全咸平
(15) 飯饌(飯のおかず)　各地・咸
(16) 豆腐滓　各地・全(済)
(17) 粟飯　各地・京咸平(参)
(18) 白米飯　江(参)
(19) 餅　各地・江咸平(参)
(20) 塩　各地・咸平(参)
(21) 焼酎　全慶忠京黄咸平◎
(22) 料理　多く・咸平
(23) 切干(瓢・南瓜等の)　多く・咸
(24) 飯(白米)　京咸平(参)
(25) 粥　各地・咸平(参)
(26) 味噌　各地・咸平(参)
(27) 油揚　各地・平(参)
(28) 猪肉　咸(参)
(29) 点心(昼飯)　多く・咸平
(30) 濁酒　多く・全
(31) 巻煙草　京咸平
(32) 胡椒　多く・全慶忠江
(33) 膾　多く・忠

全道的に調査されている項目は「粉」「肉魚」「饅頭」の３つで,「漬物」「炒麺（ほし飯の粉)」「焼酎」がそれに次ぐ。「饅頭」は朝鮮式（つまり餃子）と中国式の区別が詳細に記されている。その他, 一般的な語形は概括的に「各地, 多く」などと記されたものが多く, 具体的な地点は咸鏡道や平安道の山人参採取業者の隠語のみの項目も多い。

農耕 (30 項目)
(1) 雑草を除く(田畑に)　全慶忠京江黄平◎
(2) 鍬　全慶忠京江黄咸平●
(3) 屑(草・藁などの)　多く・全慶
(4) 雑草(また乾草)　全(済)
(5) 蒭【まぐさ】　咸
(6) シャベル(土工具)　慶忠江咸
(7) 犂(牛に引かせるもの)　慶江
(8) あんぺら　咸平(参)

(9) 蓑(みの)　全慶忠京江黄咸平●
(10) 縄　多く・全慶忠江黄咸平
(11) 手綱　多く・全
(12) 鎌　多く・京江咸平(参)
(13) 杵(女用)　全慶忠江
(14) 杵(男用)　全慶忠江
(15) 碾臼(ひきうす)　全慶京咸
(16) 犂([tʃɛŋ-i]. その條参照)の先端をなす鉄　全忠江黄咸平
(17) 砧杵(きぬた棒)　多く・全
(18) 藁縄　多く・全咸
(19) 縄(太いもの)　全慶
(20) 割木(わりき。薪)　多く・全
(21) 篩(ふるひ。目の小さいもの)　全慶忠京江黄咸平●
(22) 篩(ふるひ。目の大きいもの)　全京
(23) 箕　全慶忠京江黄咸平●
(24) 蓆　咸
(25) 農具(鍬・鋤など)　多く・全慶
(26) 鋤(ホミ)　各地・全慶忠江平
(27) 石臼　全慶忠京江黄咸平●
(28) 糠　全慶忠京江黄咸平●
(29) 籾殻　全慶
(30) 粗糠　多く・全慶

全道的に調査されている項目は「鍬」「蓑(みの)」「篩(ふるひ。目の小さいもの)」「箕」「石臼」「糠」の６つで，「雑草を除く(田畑に)」がそれに次ぐ。「雑草を除く(田畑に)」は一語ではなく，句である熟語である点で例外的である。

花果 (14 項目)
(1) 花　多く・全咸平
(2) 蕾　全慶忠京江黄咸平●
(3) 榛(はしばみ)の実　全慶忠京江黄咸◎
(4) 百合(ゆり)の花　全慶忠京江黄咸平●
(5) 棗の実　全慶忠京江黄咸平●
(6) 苺(いちご)　全慶忠江
(7) 山葡萄　全慶忠京江黄咸平●
(8) 菱(ひし)の実　全慶忠京江黄咸平●
(9) 桃　全慶忠京江黄咸平●
(10) 杏子(あんず)の実　全慶忠京江黄咸平●
(11) 李(すもも)の実　全慶忠京江黄咸平●
(12) 李の実(大きいもの)　京黄咸平
(13) 桑の実　多く・全忠
(14) 躑躅　全京黄咸平

全道的に調査されている項目は「蕾」「百合(ゆり)の花」「棗の実」「山葡萄」「菱(ひし)の実」「桃」「杏子(あんず)の実」「李(すもも)の実」の８つで，「榛(はしばみ)の実」がそれに次ぐ。

菜蔬 (38 項目)
(1) 黍　多く・慶忠江
(2) 唐辛　全慶忠京江黄咸平●
(3) 甘藷　全慶忠京江黄咸平●
(4) 馬鈴薯　全慶忠京江黄咸平●
(5) 茄子　多く・全慶咸
(6) 海苔　多く・全慶忠江咸
(7) 黒穂病(麦に)　全
(8) 殻(外皮)　全慶
(9) 薺(なづな)　全慶忠京江黄咸平●
(10) 蕪(かぶら)　多く・咸
(11) 野菜【1】　全慶忠江
(12) 野菜【2】　全慶忠
(13) 野蒜　全慶忠江
(14) 蕎麦　全慶忠京江黄咸◎
(15) 大根　全慶忠京江黄咸平●
(16) 黄瓜(きうり)　全慶忠京江黄咸平●
(17) 真瓜(まくはうり)　全慶忠江黄
(18) 大蒜(にんにく)　多く・全慶
(19) 芹(せり)　多く・全慶忠江
(20) 若布(わかめ)　多く・全
(21) 荒布(あらめ)　多く・全慶
(22) 稲　全慶忠京江黄咸平●
(23) 莧(ひゆ)　全慶忠京江黄咸平●
(24) 麦　多く・全
(25) 蜀黍(もろこし)　全慶忠京江黄咸平●
(26) 米　多く・全江黄咸平

(27) 露葵(あふひ)　全慶忠京江黄咸平●
(28) 牛蒡　全慶忠京江黄咸
(29) 玉蜀黍(たうもろこし)　全慶忠京江黄咸平●
(30) 山査子【さんざし】　全慶忠京江咸
(31) 粟　多く・全慶忠京江黄咸平○
(32) 小豆(あづき)　全慶忠京江黄咸平●
(33) 糯米(もちごめ)　多く・京黄咸
(34) 粟の糯米　京黄咸
(35) 葱(ねぎ)　全慶忠京江黄咸平●
(36) 稗(ひえ)　多く・咸
(37) 蓖麻子　全慶忠江
(38) 南瓜(カボチャ)　多く・全黄咸平

全道的に調査されている項目は「唐辛」「甘藷」「馬鈴薯」「薺(なづな)」「大根」「黄瓜(きうり)」「稲」「莧(ひゆ)」「蜀黍(もろこし)」「露葵(あふひ)」「玉蜀黍(たうもろこし)」「小豆(あづき)」「葱(ねぎ)」の 13 であり，「蕎麦」がそれに次ぐ。

金石 (11 項目)
(1) 油　全慶忠京江咸平◎
(2) 石　全慶忠江
(3) 砂　全慶忠京江黄咸平●
(4) 岩　全慶忠京江黄咸◎
(5) 鉄・金(かね)　全慶忠京江黄咸平●
(6) 水銀　多く・慶忠
(7) 石油　多く・咸
(8) 硝子(琉璃)　多く・平
(9) 砂礫　全慶忠江咸
(10) 錫　多く・平
(11) 土　全慶忠京江黄咸平●

全道的に調査されている項目は「砂」「鉄・金(かね)」「土」の３つで，「油」「岩」がそれに次ぐ。

器具 (76 項目)
(1) 鋏(はさみ)　全慶忠京江黄咸平●
(2) 馬槽(牛馬の飼料を入れる細長い桶)　全慶忠京江黄咸平●
(3) 糊刷毛(のりばけ)　全慶忠京江黄咸平●
(4) 鞦韆(ぶらんこ)　全慶忠京江黄咸平●
(5) 釜　多く・全慶忠京江黄咸平○
(6) 鏡　全慶忠京江黄咸◎
(7) 櫃(ひつ)　多く・慶
(8) 馬の銜(くつはみ)　全慶
(9) 鉛筆　各地・咸(ロ)
(10) 蓋(木製ふた)　全慶京黄
(11) 蓋(ふた)　多く・咸
(12) 熨斗(ひのし)　全慶忠京江黄咸◎
(13) 窶籔(物を頭に載せる時頭上に置く環状の敷物)　全慶忠京江黄咸◎
(14) 俎　全慶忠京江黄咸平●
(15) 斧　全慶忠京江咸平◎
(16) 盥(真鍮・鉄・ブリキ製などの)　全慶忠京江黄咸平●
(17) 洗面器　慶忠江咸
(18) 莫蓙　多く・咸
(19) 大釜　黄咸平
(20) 煙管(きせる)　京江咸平(参)
(21) ミシン(裁縫機)　全京黄咸平
(22) バケツ　咸(ロ)
(23) 木枕　全慶忠京江黄咸平●
(24) 吸口(煙管)　京黄咸平
(25) 紡車　全慶忠江
(26) ビール瓶　咸(ロ)
(27) 剃刀　忠江咸
(28) 杖【1】　多く・全京江咸平
(29) 杖【2】　多く・咸平
(30) 網(海女の腰に着けるもの)　全(済)
(31) 碁　全慶忠江
(32) 独楽(こま)　全慶忠京江黄咸平●
(33) 硯　全慶忠京江黄咸平●
(34) 枕　全慶忠京江咸
(35) 橇(そり)　京江黄咸平
(36) 梭(をさ)　多く・全黄咸平
(37) 太鼓　多く・咸

(38) 火箸　全慶忠江咸
(39) 十能　全忠黄平
(40) 水汲み杓(夕顔の殻を半截したもの)　全慶忠京江咸平◎
(41) 瓶　多く・全慶忠江
(42) 箒　多く・全慶忠
(43) 大口土盆　咸
(44) 針　多く・全咸平
(45) 燐寸(マッチ)　全慶忠京江黄咸◎
(46) 燐寸箱　多く・全慶
(47) 綿繰車(わたくりぐるま)　全慶忠京江黄咸◎
(48) 抽斗(ひきだし)　全慶忠京江黄咸平●
(49) 鎖　全慶
(50) 匙(さじ)　多く・全慶忠京江黄咸平○
(51) 砥石(といし)　全慶忠京
(52) 鼎　多く・咸
(53) 時計　多く・咸
(54) 小鍋(真鍮製)　多く・江
(55) 蒸籠(せいろ)　多く・平
(56) 木製食器　咸平(参)
(57) 笊籬(ざる)　全慶忠京江
(58) 箸　全慶忠京江黄咸平●
(59) 紡績　慶忠江咸平
(60) 柄(え)　全慶忠京江黄咸平●
(61) 尺(ものさし)　多く・全慶
(62) 飯杓子　全慶忠江
(63) 棒(頭部の二股になったもの)　全慶
(64) 毬(遊具，足先にて蹴るもの)　全慶京黄咸平
(65) 横笛　多く・全咸平
(66) 袋(人参を入れる)　咸平(参)
(67) 銃　多く・咸(参)
(68) 包丁・ナイフ　多く・咸平(参)
(69) 鳥網　全京黄咸
(70) 唾壺(たんつぼ)　多く・全
(71) 瓢(海女の腰に着ける)　全(済)
(72) 票(ふだ。きっぷ)　全慶忠京江黄咸平●
(73) 觱篥(笛の一種)　多く・咸
(74) 火爐(火鉢)　全慶忠京江黄咸平●
(75) 泥鏝(こて)　全京黄咸平
(76) 壺　全慶忠江

全道的に調査されている項目は「鋏(はさみ)」「馬槽」「糊刷毛」「鞦韆(ぶらんこ)」「俎」「盥」「木枕」「独楽(こま)」「硯」「抽斗(ひきだし)」「箸」「柄(え)」「票(ふだ。きっぷ)」「火爐(火鉢)」の 14 個で，「鏡」「熨斗(ひのし)」「窶籔」「斧」「水汲み杓」「燐寸(マッチ)」「綿繰車」がそれに次ぐ。ここでも咸鏡道ではロシア語からの借用語が多くあげられている。

舟車 (11 項目)
(1) 車(車体或は車輪)　忠江咸
(2) 車輪の縁　慶京江黄平
(3) 小船　全慶京黄
(4) 小船(主として山地の)　忠黄咸平
(5) 独木舟　全慶咸平
(6) はしけ　全慶忠江黄
(7) 艪　慶忠江咸
(8) 柁(かぢ)　慶忠
(9) 筏　全慶京江
(10) 氷滑り　全慶忠京江黄咸◎
(11) 太い縄　慶

全道的に調査されている項目はなく，「氷滑り」がそれに準ずる。

飛禽 (29 項目)
(1) 雁　慶忠京江
(2) 鵲(かささぎ)　全慶忠京江黄咸平●
(3) 鵝鳥　全慶忠京江黄咸平●
(4) 烏(からす)　全慶咸平
(5) 雉(きじ)　全慶忠京江黄咸◎
(6) 胡燕(大形の燕)　全慶京江黄咸平◎
(7) 燕　全慶忠京江咸
(8) 鷦鷯(みそさざい)　全(済)
(9) 啄木鳥　全慶忠京江黄咸平●
(10) 鷲　全慶忠京江黄咸平●
(11) 鳶　全慶忠江咸
(12) 鶴　全慶忠江

(13) 雞　多く・全江咸
(14) 雞を呼ぶ声　黄咸平
(15) 雞卵　多く・全
(16) 山雉　多く・咸(参)
(17) 鶉　全慶忠京
(18) 鳥の餌　全慶忠京江黄咸平●
(19) 嘴　慶忠京江黄咸平◎
(20) 雛　全慶忠京江黄咸平●
(21) 鳥(とり)　多く・全京黄
(22) 雀　全
(23) 梟　全慶忠京江
(24) 鴨　多く・慶
(25) 雌雉　全慶
(26) 親雉　全(済)
(27) 幼雉　全(済)
(28) 雲雀　全慶忠京江黄咸◎
(29) 鶻(はやぶさ)　黄咸平

全道的に調査されている項目は「鵲(かささぎ)」「鵝鳥」「啄木鳥」「鷲」「鳥の餌」「雛」の6つで,「雉」「胡燕(大形の燕)」「嘴」「雲雀」がそれに次ぐ。

走獣 (61 項目)

(1) 猫　全慶忠京江黄咸平●
(2) 蠶(たてがみ)　全慶忠京江黄咸平●
(3) 犬の子　全慶忠江
(4) 亀　全慶忠京江黄咸平●
(5) 尾　多く・全慶忠京江黄咸平○
(6) 雌雄(禽獣に)　咸
(7) 犬　多く・黄咸平
(8) 一種の矮狗　京黄咸平
(9) 子犬を呼ぶ声　黄咸平
(10) 猫を呼ぶ声　全慶京黄
(11) 熊　多く・咸平(参)
(12) 獐　全慶忠京江黄咸平●
(13) 雌獐　全
(14) 鹿の一種　全慶
(15) 栗鼠　多く・咸平(参)
(16) 鼢(むぐら)　全慶忠江
(17) 豚　多く・江(参)
(18) 豚を呼ぶ声　咸
(19) 猪　全慶忠江咸平
(20) 馬　全慶忠京江黄咸平●
(21) 馬の子　全慶忠江
(22) 黒馬　全(済)
(23) 白馬(青黒色交る)　全(済)
(24) 線瞼馬　全(済)
(25) 栗毛馬　全(済)
(26) 黄馬　全(済)
(27) 紅紗馬　全(済)
(28) 斑馬　全(済)
(29) 薄黒馬　全(済)
(30) 赤馬　全慶黄咸平
(31) 赤馬(赤薄くして黒く見ゆ)　全(済)
(32) 青馬　全(済)
(33) 台星馬　全(済)
(34) 馬の耳わきの長い毛　全(済)
(35) 牛　多く・全慶江咸平
(36) 牛肉　全慶京平
(37) 牛の子　全慶
(38) 赤牛　慶京黄咸平
(39) 一歳牛　咸平
(40) 二歳牛　咸平
(41) 三歳牛　咸平
(42) 四歳牛　咸平
(43) 十歳牛　咸
(44) 二十歳牛　咸
(45) 発育悪しき牛　全(済)
(46) 子牛を呼ぶ声　咸
(47) 貰牛(牛を他人に貸与し,その報酬として子牛を無代にて譲り受けること)　咸平
(48) 牛馬　全
(49) 角(つの)　一般・慶忠咸平
(50) 貂皮　京咸平
(51) 貂鼠　咸平(参)
(52) 虎　多く・京江咸平
(53) 豹　全京黄咸平
(54) 水獺(かはをそ)　咸
(55) 鹿　多く・咸(参)
(56) 狐　全慶忠京江黄咸平●
(57) 鼠　多く・全慶咸平
(58) 猿　多く・江咸
(59) 鼬　多く・平(参)

(60) 兎　全慶忠江
(61) 蝙蝠　全慶忠京江黄咸◎

全道的に調査されている項目は「猫」「蠶(たてがみ)」「亀」「獐」「馬」「狐」の６つで，「蝙蝠」がそれに次ぐ。馬の色の種類に関する語彙は済州島に特有のものであり，また，牛の歳による呼称は平安道，咸鏡道に特有である。

水族 (18 項目)
(1) 蟹　全慶忠京江黄咸平●
(2) 蛭　全慶忠京江黄咸平●
(3) 蝦　全慶忠京江黄咸平●
(4) 螺螺(さざえ)　全慶忠
(5) 田螺(たにし)　慶京江咸
(6) 貝　全慶忠江咸
(7) 魚　多く・咸平(参)
(8) 鯖　全慶京黄咸平
(9) 鯛　全慶忠江
(10) 鰯　全慶忠京江黄咸◎
(11) 望魚　全
(12) 鮒　多く・黄
(13) 魴【ボラ】　多く・京黄
(14) 鰍(とぢゃう)　咸
(15) 鮎(あゆ)　全慶忠京江黄咸平●
(16) 松魚　咸平
(17) 烏賊(いか)　全慶忠江
(18) 魚を釣る餌　全慶忠京江黄咸◎

全道的に調査されている項目は「蟹」「蛭」「蝦」「鮎」の４つで，「鰯」「魚を釣る餌」がそれに次ぐ。

昆虫・爬虫等 (27 項目)
(1) 虫　全慶忠京江黄咸平●
(2) 蛍　全慶忠京江黄咸◎
(3) 蝶　全慶忠江
(4) 虻　慶忠京江
(5) 蚜虫(あぶらむし)　全慶忠江
(6) 蟬　全慶忠江
(7) 螽斯(いなご)　全慶忠江
(8) 蜂　全慶忠京江黄
(9) 蜻蜓(とんぼ・やんまなど)　全慶忠江咸
(10) 蝿　全慶忠京江黄咸平●
(11) 牛蝿　慶江
(12) 蜉蝣(かげろふ)　全慶忠江
(13) 蠐螬(ぢむし)　全慶忠京江黄咸平●
(14) 蟋蟀　全慶忠江
(15) 蚕　全慶忠京江黄咸平●
(16) 蛹　全慶忠江
(17) 虱　多く・全(済)
(18) 蚤　全慶忠京江黄咸平●
(19) 蝸牛　全慶忠京江黄咸平●
(20) 蜈蚣(むかで)　全慶忠江
(21) 松虫(松樹に棲む一種の虫)　咸平(参)
(22) 蚯蚓　全慶忠京江黄咸平●
(23) 蛙　全慶忠江咸
(24) 蝌蚪　全慶忠京江咸
(25) 蟾蜍(ひきがへる)　全慶黄咸平
(26) 蛇　多く・江咸平(参)
(27) 蜥蜴(とかげ)　全慶忠京江

全道的に調査されている項目は「虫」「蝿」「蠐螬(ぢむし)」「蚕」「蚤」「蝸牛」「蚯蚓」の７つであり，「蛍」がそれに次ぐ。「全慶忠江」のように南部地域のデータしか存在しない項目も多い。

草木 (36 項目)
(1) 木　全慶忠京江黄咸平●
(2) 草　一般・江(参)
(3) 酸漿(ほほづき)　全慶忠江
(4) 桔梗　全慶忠江
(5) 蔓　慶忠江
(6) 芝草　全慶忠江

(7) 茅(ちがや)　多く・全(済)
(8) 荏子(えごまの種子)　全慶
(9) 青苔(水中の岩石などに生えるもの)　全慶忠江
(10) 枝　全忠京江黄咸平◎
(11) 葉　全慶忠江黄平
(12) 嫩葉(わかば)　多く・咸
(13) 茎　多く・全慶京黄咸
(14) 橡樹(ならのき)　全
(15) 蜜柑　全慶
(16) 楓(かへで)　全慶忠京江黄咸平●
(17) 木頭菜(たらのき)　京黄咸平
(18) 根　全慶忠江
(19) 杉　全慶江黄咸平
(20) 石榴　全
(21) 松の木　多く・全慶
(22) 油木　多く・平(参)
(23) 胡桃(くるみ)　全慶京黄咸平
(24) 人参　多く・咸平(参)
(25) 人参(葉が一様に生じたもの)　平(参)
(26) 人参(葉が一様に生じないもの)　平(参)
(27) 人参(葉の三枚あるもの)　平(参)
(28) 人参(葉の四枚あるもの)　平(参)
(29) 人参(三年以上経過して葉の四枚あるもの)　平(参)
(30) 人参(三年以上経過して葉の三枚あるもの)　平(参)
(31) 人参(葉の五枚あって節あるもの)　平(参)
(32) 人参(葉の五枚あるもの)　平(参)
(33) 入山者の長　平(参)
(34) 始めて入山する者　平(参)
(35) 薪(たきぎ)　江咸(参)
(36) 藪　全

全道的に調査されている項目は「木」「楓(かへで)」の２つのみで，「枝」がそれに次ぐ。特徴的な語彙は人参の種類に関するもので，すべて平安道の山人参採取業者の隠語である。

形容詞 (36 項目)
(1) 軽い　全慶忠京江黄咸平●
(2) 深い　全慶忠京江咸
(3) 近い　全慶忠京江黄咸平●
(4) 長い　全慶忠京江咸
(5) やうである(如し)　多く・全
(6) 太い　全慶
(7) 寂しい　全京
(8) 痒い　全忠京江咸
(9) 煩はしい　全慶京江黄咸
(10) 煙い　全慶京黄咸
(11) 熱い　全京黄咸平
(12) 清らかである　全慶忠江
(13) 明るい　全慶忠京江
(14) 酸い　全慶忠京江黄咸平●
(15) 苦(にが)い　全京咸
(16) 心地よい　全慶京
(17) 孤独である　慶京江咸平
(18) 難い(むづかしい)　慶忠京江
(19) 可笑しい　全京黄咸平
(20) 貴い　多く・咸
(21) 眠い　全慶忠京江黄咸平●
(22) 善い　全慶忠京江黄の大部分・咸平○
(23) 鹹(しほから)い　全慶忠京江黄咸平●
(24) 小さい・少ない　慶忠江
(25) 美しく(連用形)　全慶忠京江
(26) 近く(連用形)　慶咸平
(27) 痒く(連用形)　忠江咸
(28) 暑く(連用形)　全慶忠京江平
(29) 辛(から)く(連用形)　全慶忠京江黄咸平●
(30) 畏ろしく(連用形)　忠京江咸
(31) 羨ましく(連用形)　全慶忠京江黄咸平●
(32) 賢く(連用形)　忠京江咸
(33) 鹹(しほから)く(連用形)　慶
(34) 寒く(連用形)　慶忠京江黄咸平◎
(35) 多く(連用形)　全慶
(36) 冷たく(連用形)　多く・忠江咸

終止形と連用形が含まれているが，同じ項目に両方の活用形が揃うものはあまりない。全道的に調査されている項目は「軽い」「近い」「酸い」「眠い」「鹹(しほから)い」「辛(から)く(連用形)」「羨ましく(連用形)」の７つで，「寒く(連用形)」がそれに準ずる。

動詞 (70 項目)

(1) 耐(こら)へる　全慶忠京江咸
(2) 養ふ　全慶忠京江黄
(3) 喜ぶ　全
(4) 待つ　忠京江咸
(5) 持って来る　全慶京黄咸平
(6) 止める　全慶
(7) 曰ふ　全(済)
(8) 改める　全
(9) 渡り(水を)行く　全慶京黄咸
(10) 行く・来る　咸平(参)
(11) 走らす　多く・慶江
(12) 減る(自動)　多く・咸
(13) 降ひ落す　多く・慶京江黄
(14) 廻(まは)す　多く・江咸
(15) 聞く　多く・江咸
(16) 殴打する　多く・全慶京
(17) 閉ぢる　多く・全(済)
(18) 填める　全慶忠
(19) 食ふ　全慶忠京江・咸平(参)
(20) 乾く　全慶忠京江
(21) 乾かす　慶
(22) 裁つ　全慶忠江
(23) 枯れる　全慶忠江
(24) 踏む　全慶忠京江
(25) 吮ふ【吸う】　全慶忠京江
(26) 塗る　全慶忠江
(27) 照る　全慶忠京江
(28) 生(いか)す　多く・慶忠江黄
(29) 植ゑる　全慶忠京江
(30) 買ふ　多く・咸平
(31) 捕へる　全(済)
(32) 痩せる　全慶忠京江黄咸平●
(33) 窺ふ　多く・全江咸
(34) 忘れる　多く・咸平
(35) 熟する　多く・黄平
(36) 成らない　多く・全慶京黄咸平
(37) 縛る　慶忠京江
(38) 開く(自動)　多く・咸
(39) 来れ(命令)　全慶忠江
(40) 誦んずる　全慶忠京江黄咸◎
(41) 有る・居る　全(済)
(42) 読む　慶忠江咸
(43) 可愛く思ふ　全慶
(44) 落ちる　多く・平
(45) 崩れる　全慶
(46) 過ぎ行く　多く・咸平
(47) 搗く　多く・黄平
(48) 怖れる・憂へる　全(済)
(49) 寝る　一般・京江咸(参)
(50) 死ぬ・殺す　咸(参)
(51) 焦げる　全(済)
(52) 売る　全慶忠京江
(53) 伸(のば)す　全慶忠
(54) 考量する　全慶忠京江咸
(55) 繭糸を績ぐ　慶忠江黄咸平
(56) 点火する　京咸
(57) 掠める　全(済)
(58) 炙り(連用形)　全慶忠京江黄咸平●
(59) 恋ひ(連用形)　京黄咸
(60) 補綴し(連用形)　全忠京江咸
(61) 拾ひ(連用形)　全慶忠江咸
(62) 捧げ(連用形)　咸
(63) 癒り(連用形)　全慶忠江咸
(64) 洗ひ(連用形)　慶忠江
(65) 続き(連用形)　慶忠江
(66) 啄み(連用形)　全慶忠京江黄咸平●
(67) 集まり(連用形)　京黄咸
(68) 有り(連用形)　全慶忠京江黄咸◎
(69) 吠え(連用形)　全慶忠江
(70) て(「見て来る」・「為てやる」などの連用形)　全(済)

ここでは主として現在終止形と連用形が調査されているが，1つの項目についてそれらがともに調査されているものが少ないのは，形容詞の場合と同様である。全道的に調査されている項目は比較的少なく，「痩せる」「炙り(連用形)」「啄み(連用形)」の3つで，「誦んずる」「有り(連用形)」がそれに準ずる。それ以外では，半島の南半分だけ（「全慶忠江」など）が調査されている項目が多い。(70) は済州だけで用いられる語尾が例外的に含まれているものである。

助動詞 (425 項目)

用言語幹に後続する語尾およびその結合体のさまざまな形。地域ごとに固有のものが多く，紙幅の関係で詳細は省略する。

副詞 (19 項目)

(1) 僅かに　全慶忠京江黄咸◎
(2) 斯く　全(済)
(3) 徐ろに【おもむろに】　咸平
(4) 却って　全慶忠京江黄咸◎
(5) 唯だ　全慶京
(6) 予め　多く・咸
(7) 終に　全京
(8) 皆　全京
(9) 何故　多く・全(済)
(10) 甚だ　全慶京黄咸
(11) 尖れるさま　全慶忠京江黄咸平●
(12) 速かに　全慶忠京江黄咸平●
(13) 既に　全慶忠京江
(14) 別に　全慶忠京江黄咸平●
(15) 総て　全京黄咸平
(16) 決して…ない　咸
(17) 僅か　全京
(18) 常に　多く・咸
(19) 多く　多く・全(済)

全道的に調査されている項目は「尖れるさま」「速かに」「別に」の 3 つで，「僅かに」「却って」がこれに次ぐ。(4)「却って」の各地の語形の中には中世語の hhye-, hye- の活用形に相当するものを含む [to-ro-hjɔ], [to-ri-hjɔ] などがあり，注目される。

助詞 (25 項目)

(1) (し)て(「為て」「捧げて」・「造って」などの「て」)　京黄咸平
(2) ならば　多く・全(済)
(3) やら(「有るやら無いやら」のやら)　咸
(4) を(目的格)　全慶京黄咸
(5) ために(「する為めに」,「遊ぶ為めに」など)　全慶忠京江咸
(6) と(與に)　一般・全慶忠江黄咸
(7) が(主格)　一般・全平
(8) よ(強辞)　全(済)
(9) ならば　一般・全慶忠江咸
(10) ながら　一般・全(済)
(11) こそ(なければならぬ)　一般・全慶
(12) に・へ　一般・慶
(13) (し)ない(否定，婦人用語)　咸
(14) (し)ない(否定)　多く・平
(15) ね(強辞)　全(済)
(16) 以来　多く・全(済)
(17) ならば　多く・全(済)
(18) (する・した)のに　多く・全(済)
(19) (する・した)が・(し)て　多く・全(済)
(20) (する・した)と(引用語句に)　多く・全(済)
(21) (する・した)と(引用語句に)　多く・全(済)
(22) (せ)よと(命令句の引用)　多く・全(済)
(23) (せられ) よと(命令句の引用)　多く・全(済)
(24) (し)ようと(引用句に)　多く・全(済)
(25) (する)だろうと(引用句に)　多く・全(済)

ここで助詞と呼ばれているのは，今日韓国語学で用いられている助詞だけではなく，用言語尾も含まれる。全道的に調査されている項目はない。(16) 以降の項目は，主に済州島の特異な語尾・引用形式を示すためのものである。

接頭辞・接尾辞 (7 項目)

(1) 年長の　全慶忠京江黄咸平●
(2) 幾　全慶忠京江
(3) ら(複数)【1】　咸
(4) ら(複数)【2】　全慶京
(5) 番目　多く・全慶
(6) 帙・襲・件(器具・衣類などを数へる語)

全慶忠京江　　(7) 歳(一歳・二歳など)　多く・全(済)

全道的に調査されている項目は「年長の」のみである。

句・短文 (7 項目)

(1) 辺りに　全慶忠京江
(2) 様子だ(らしい)　全(済)
(3) 然り　一般・全慶
(4) はい(返答の言葉)　全慶江黄咸平
(5) 有難い　黄咸
(6) 聞いて　全慶京黄咸
(7) (必ずする)よ　咸

全道的に調査されている項目はない。(6)の「聞いて」は，句・短文ではなく，t 変則用言の活用の方言による違いに関するもの([tùt-ko] 対 [tùl-ko])である。なお，[tùl-ko] の実際の発音は [tùl-ʔko] と推定される。

雑 (33 項目)

(1) 経営　全慶忠京江黄咸平●
(2) 昼寝　京黄咸平
(3) 煙　全慶忠京江黄咸平●
(4) 臭気　慶忠京江
(5) 笑ふこと　平(参)
(6) 塵　全慶忠京江黄咸平●
(7) 化物(ばけもの)　全慶京
(8) 両(以前の金銭の単位，三両・五両など)　多く・平
(9) 何　全京黄咸平
(10) 様子　多く・全
(11) 言葉　一般・江(参)
(12) 火　一般・江咸平(参)
(13) 炭　全慶忠京江黄咸平●
(14) まま事　京黄咸
(15) 祭祀・夜祭　全(済)
(16) 貧乏人が富家に入ること　咸
(17) 松明(たいまつ)　一般・平(参)
(18) 掛値(かけね)　多く・全慶
(19) 六　多く・江咸
(20) 八　全忠京江咸
(21) 六十　多く・平
(22) 例事　多く・咸平
(23) 一致　多く・咸平
(24) 幾何【いくつ，いくら】　京咸
(25) 篝火(かがりび)　咸平(参)
(26) 弄戯　咸
(27) 智慧　多く・咸平
(28) 各　咸
(29) 灰　一般・全(済)
(30) 群　全(済)
(31) 独り　全慶忠京江黄
(32) 帰ること(山の仮小屋に)　咸平(参)
(33) 回答　全慶忠京江黄咸平●

「雑」と分類されたこれらの項目は，上で行われている分類には入れられないもので，抽象的概念や数詞などが含まれる。全道的に調査されている項目は「経営」「煙」「塵」「炭」「回答」の 5 つである。「経営」「六十」「例事」「一致」「回答」は漢字音の特徴を示すための項目である。また，済州島や咸鏡道に特有の語彙も含まれる。

## 5 終わりに

本稿では，小倉進平の『朝鮮語方言の研究』を活用するための注意事項として，調査地点，音声表記，調査項目などに関して，疑問点や特徴をあげてそれをどのように理解すべきかを示すとともに，今後，言語地図を作る際の候補となる項目を選定した。

全道的な調査が行われていて，言語地図を描くにふさわしい項目は次の 155 項目である。

暁，星，夕焼，陽炎，細雨，雹，夏，秋，夕，村落，野原，丘，樵路，路，山・墓，穴，溝【2】，海，波，渡船場，浅瀬，井戸，側，角(かど)，外，姉妹，子の妻，男子・男児，女【1】，売卜者，巫女，瞼，頬，唇，兎唇の人，舌，牙，頤，臍，肺臓，腎臓，肝，臂，膝，病，唖者，痣，痲疹，力，柱，瓦，煙出し，釘，台所，棚，耳輪，ポケット，木履，髢，周衣，木綿，簪，木靴(式典用)，裳(婦女用)，粉，肉魚，饅頭，鍬，蓑，篩(目の小さい)，箕，石臼，糠，蕾，百合の花，棗の実，山葡萄，菱の実，桃，杏子の実，李の実，唐辛，甘藷，馬鈴薯，薺(なづな)，大根，黄瓜(きうり)，稲，莧(ひゆ)，蜀黍，露葵，玉蜀黍，小豆，葱，砂，鉄・金(かね)，土，鋏，馬槽，糊刷毛，鞦韆，俎，盥，木枕，独楽，硯，抽斗，箸，柄(え)，票，火爐，鵲，鵝鳥，啄木鳥，鷲，鳥の餌，雛，猫，蠶(たてがみ)，亀，獐，馬，狐，蟹，蛭，蝦，鮎，虫，蝿，蟾蜍，蚕，蚤，蝸牛，蚯蚓，木，楓，軽い，近い，酸い，眠い，鹹い，辛く(連用形)，羨ましく(連用形)，痩せる，炙り(連用形)，啄み(連用形)，尖れるさま，速かに，別に，年長の，経営，煙，塵，炭，回答

また，それより1道少ない7道にわたって調査が行われ，上のものに準ずる項目は以下の48項目である。

垂氷，正月，冬，崖路，小川【2】，泉，弟，子女・女児，柴扉，靴(国語起源)，下駄，笠子(冠の一種)，靴下，足紐，麻製の鞋，石鹸，麻布，周衣(綿入)，漬物，炒麺，焼酎，雑草を除く，榛の実，蕎麦，油，岩，鏡，熨斗，窶籔，斧，水汲み杓，燐寸，綿繰車，氷滑り，雉，胡燕，嘴，雲雀，蝙蝠，鰯，魚を釣る餌，蛍，枝，寒く(連用形)，誦んずる，有り(連用形)，僅かに，却って

また，語形の中に「一般，各地，多くの地方」などと記されたものが含まれ，地図化の難しい面はあるが，一応8道のデータが存在するものは次の6項目である。

学校，粟，釜，匙，尾，善い

今後，これらの209項目について言語地図を作りながら，あわせて語彙史の考察を行っていく予定である。

最後に将来的な課題について2つ述べておきたい。1つは今日の標準語形に関する問題である。当時は今日のような意味での標準語は存在しなかったと言ってもいいであろう。そのせいか，小倉進平の調査項目の中には，今日の標準語形にあたるものが存在しない場合や，それがごくわずかしか用いられず，しかも京城以外の地域にしか存在しないような例がしばしば見られる。こうしたことは今日の標準語の成立過程を知るための1つの資料とすることができる。

2つ目の課題は，本稿では「助動詞」の項目については触れなかったが，文法的意味をしかるべく分類し，それに合わせて同じ意味を表わすと考えられるいくつかの項目をまとめれば，文法項目についても，例えば日本における『方言文法言語地図[8]』のような言語地図を描くことが可能かもしれない。

[8] 全6巻，1989年～2006年，国立国語研究所。

参考文献

小倉進平 (1931a) 朝鮮語母音の記号表記法に就いて.『音声の研究』4: 139–148. 日本音声学会.

小倉進平 (1931b) 済州島方言.『青丘学叢』5: 26–70. 青丘学会.

小倉進平 (1934) 諺文のローマ字表記法. 『小田先生頌壽記念朝鮮論集』京城 : 大阪屋號書店.

小倉進平 (1944)『朝鮮語方言の研究』(上下) 東京：岩波書店.

韓国精神文化院編 (1987–1995)『韓国方言資料集』(全 9 巻) .

金亨奎 (1974)『韓国方言研究』ソウル大学校出版部.

河野六郎 (1945)『朝鮮語方言学試攷—「鋏」語考—』京城帝国大学文学会論纂第 11 集.

玄平孝 (1985)『済州島方言研究』(資料篇・論考篇)ソウル：二友出版社.

崔鶴根 (1978)『韓国方言辞典』ソウル：玄文社.

鄭承喆 (1995)『済州島 方言의 通時音韻論(済州島方言の通時音韻論)』国語学叢書 25. ソウル：太学社.

中井精一 (1997)『朝鮮半島言語地図』平成 18 年度科学研究費(基盤研究(B)(1))日本海沿岸社会の地域特性と言語に関する類型論的研究.

李基文 (1991)『国語語彙史研究』ソウル：東亜出版社.

李秉根 (2004)『어휘사(語彙史)』ソウル：太学社.

李秉根 (2005) 1910–20 년대 일본인에 의한 한국어연구의 과제와 방향—小倉進平의 方言研究를 중심으로— (1910-1920 年代の日本人による韓国語研究の課題と方向—小倉進平の方言研究を中心に—). 『방언학(方言学)』2: 23-61. 韓国方言学会.

李崇寧 (1976)『革新国語学史』博英文庫 101, ソウル：博英社.

李翊燮他 (2008)『韓国言語地図』ソウル：太学社.

Fukui, Rei (2015a) On the history of words for sweet potato and potato in Korean. *Papers from the Second International Conference on Asian Geolinguistics*. 59–70.

Fukui, Rei (2015b) The sun in Korean. *Studies in Asian Geolinguistics*. 1: 55–60.

Pullum, Geoffrey K. and Ladusaw, William A. (1996) *Phonetic Symbol Guide*. (Second edtion) The University of Chicago Press. (日本語訳：土田滋・福井玲・中川裕訳 (2004)『世界音声記号辞典』東京：三省堂.)

Umeda, Hiroyuki (1960) On the phonemes of Cheju dialect of Korean. *Nagoya Daigaku Bungakubu Kenkyuu Ronsyuu* 22, *Bungaku* 8: 17–46. Nagoya University.

# Dialect Surveys Conducted by Ogura Shinpei: In Order to Make Use of the Data Contained in *Chōsengo Hōgen no Kenkyū*

FUKUI, Rei
fkr@l.u-tokyo.ac.jp

Keywords: Korean language, dialect survey, Ogura Shinpei, linguistic map

Abstract

It is well known that Ogura Shinpei had conducted dialect surveys throughout the Korean peninsula from the 1910s through 1930s, and published his last comprehensive work on Korean dialectology in 1944 (*Chōsengo hogen no kenkyū* (Studies in the Korean dialects)).

The aim of this paper is to closely examine various aspects of his data contained in this work, e.g., the locations for dialect surveys, various problems found in his phonetic transcriptions and the features of the vocabulary used in his dialect surveys. Based on these examinations, the author selected a group of words for which the data from all provinces of Korea are present, in order to draw linguistic maps that are necessary for a historical study of Korean vocabulary.

（ふくい・れい　韓国朝鮮文化研究専攻）